

東洋文庫
379

平凡社

今昔物語集

9

震旦部

池上洵一 訳注

いけがみじゅんいち

池上 洵一

昭和12年岡山県生。神戸大学文学部卒(昭35)。

東京大学大学院人文科学研究科修了(昭41)。

現職 神戸大学文学部助教授。

専攻 日本文学(古代中世説話文学)。

主著 『今昔物語集一本朝部一』(共訳,平凡社「東洋文庫」),『三國伝記』(三弥井書店「中世の文学」)他。

今昔物語集9 震旦部〔全2巻〕

東洋文庫 379

1980年6月20日 初版第1刷発行

定価 1,500円

訳注者 池上 洵一

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中 邦彦

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

発行所 郵便番号102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1980 不良本は、直接小社サービス課で
Printed in Japan お取替え致します(送料小社負担)

凡 例

- 一 本書は『今昔物語集』震旦部全五巻の口語訳を二冊に分けたうちの第一冊であり、巻六・七が収載されている。なお巻八は諸本共通の欠巻である。
- 一 本書の口語訳の原本には、岩波書店版・日本古典文学大系『今昔物語集』の本文を使用した。
- 一 口語訳は、原則として意訳を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語を補い、または省くなどして意訳したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。
- 一 本文中□により罫まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。〔 〕内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類話、あるいは確実な理由によって推定できる場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠や理由は、それぞれの話末に注記した。
- 一 偈や経文の類は、原則として本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として話末に示した。
- 一 平易な用語に訳しにくい語句や、原文に問題があつて文意がわかりにくい部分、原文に明らかな誤謬がある部分などについては、話末の注記により簡略な説明を加えた。

一 話末の注記に引用する文献は、原則として、その話の出典もしくは最も近い類話を有する文献に限定した。

一 各話の題名は、なるべく原文の読みくだしに近く口語訳するように努めた。

一 本書の製作にあたっては、国東文麿氏の明治書院版・校注古典叢書『今昔物語集』をはじめ、諸先学の研究に教えられるところが多かったが、なかでも山田孝雄・同忠雄・同英雄・同俊雄四氏校注の日本古典文学大系『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、多方面にわたって絶大な恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目 次

凡 例

卷第六 震旦・仏法

- 震旦しんだんの秦の始皇の時、天竺てんしくの僧が渡来する語 第一
 震旦の後漢の明帝の時、仏法が伝来する語 第二
 震旦の梁の武帝の時、達磨だるまが渡来する語 第三
 康僧会こうそうえ三蔵、呉国ごこくに行つて仏舍利ぶつしやりを出す語 第四
 鳩摩羅焰くまらえん、仏像を盗み奉つて震旦に伝える語 第五
 玄奘げんじやう三蔵、天竺に渡り、法を伝え受けて帰つて来る語 第六
 善無畏ぜんむい三蔵、胎藏界曼陀羅たいざうかいまんだらを震旦に伝える語 第七
 金剛智三蔵こんごうち、金剛界曼陀羅こんごうかいまんだらを震旦に伝える語 第八
 不空三蔵ふくう、仁王呪にんのじゆを誦とえて験げんを現あらわす語 第九

震旦の国子祭酒肅環、多宝を得る語	第二十六	八四
震旦の并州の常愍、天竺に渡って盧舍那を礼拝する語	第二十七	八八
震旦の興善寺の含照、千仏を礼拝する語	第二十八	九〇
震旦の汴州の女、金剛界を礼拝して蘇ることを得る語	第二十九	九二
震旦の沙弥、胎藏界を念じて難を免れる語	第三十	九三
天竺の迦弥多羅、華嚴經を震旦に伝える語	第三十一	九四
震旦の僧靈幹、華嚴經を講じる語	第三十二	九六
震旦の王氏、華嚴經の偈を誦して蘇ることを得る語	第三十三	一〇〇
震旦の空觀寺の沙弥、華嚴世界を觀じて蘇ることを得る語	第三十四	一〇三
孫宣德、華嚴經を書写する語	第三十五	一〇四
新羅の僧愈、阿含を受持する語	第三十六	一〇七
震旦の并州の道如、方等を書写して浄土に生まれる語	第三十七	一〇九
震旦の会稽の山陰県の書生、維摩經を書写して浄土に生まれる語	第三十八	一一〇
震旦の法祖、閻魔王宮において楞嚴經を講じる語	第三十九	一一三
震旦の道珍、初めて阿弥陀經を読む語	第四十	一一五
張居道、四卷經を書写して蘇ることを得る語	第四十一	一二七

義浄三蔵、最勝王經を訳す語 第四十二

一九

震旦の曇鸞、仙經を焼いて浄土に生まれる語 第四十三

二三

震旦の僧感、觀無量壽經・阿弥陀經を誦持する語 第四十四

二三

震旦の梓州の鄭県の姚待、四部の大乘を写す語 第四十五

二五

震旦の張謝敷、藥師經の力により病いを除く語 第四十六

二七

震旦の張李通、藥師經を書写して壽命を延ばす語 第四十七

二九

震旦の童児、壽命經を聞いて壽命を延ばす語 第四十八

三三

卷第七 震旦・仏法

唐の玄宗、初めて大般若經を供養する語 第一

一三

唐の高宗の代、書生、大般若經を書写する語 第二

一六

震旦の予州の神母、般若を聞いて天に生まれる語 第三

一八

震旦の僧智、大般若經二百卷を暗誦する語 第四

二一

震旦の并州の道俊、大般若經を写す語 第五

二四

震旦の靈運、天竺に渡って般若の在すところを踏む語 第六

二五

震旦の僧、大品般若を誦誦して天人の供養を得る語	第七
震旦の天水郡の志達、般若により寿命を延ばす語	第八
震旦の宝室寺の法蔵、金剛般若を誦持して蘇ることを得る語	第九
震旦の并州の石壁寺の鳩、金剛般若経を聞いて人に生まれる語	第十
震旦の唐の代、仁王般若の力により雨を降らす語	第十一
震旦の唐の代、太山府君の廟に宿って仁王経を誦する僧の語	第十二
恵表比丘、無量義経を震旦に伝える語	第十三
震旦の法華を受持する者、唇と舌とを現わす語	第十四
僧、羅刹女のために嬈乱され、法華の力により命を存える語	第十五
震旦の定林寺の普明、法華経を転読して靈を伏する語	第十六
震旦の会稽山の弘明、法華経を転読して鬼を縛する語	第十七
震旦の河東の尼、法華経を誦誦して持経の文字を現わす語	第十八
震旦の僧、太山府君の廟に宿って法華経を誦し、神を見る語	第十九
沙弥、法華経を読むに二字を忘れ、ついに悟ることを得る語	第二十
予州の恵果、法華経を誦誦して廁の鬼を救う語	第二十一
瓦官寺の僧恵道、蘇って後、法華経を写す語	第二十二

一八八
一九一
一九四
一九七
二〇〇
二〇三
二〇五
二〇七
二一二
二一五
二一九
二二二
二二八
二三一
二三四

卷第八

諸本欠

真寂寺の恵如、閻魔王の招きを受ける語 第四十六
震旦の邵師弁、蘇つて戒を守る語 第四十七
震旦の華州の張法義、懺悔により蘇る語 第四十八

解説

今^{こん}
昔^{じやく}
物^{もの}
語^{がたり}
集^{しゅう}
9

震^{しん}
旦^{だん}
部^ぶ

池^{いけ}
上^{がみ}
洵^{じゆん}
一^{いち}
訳注

卷第六

震旦・仏法

震旦しんだんの秦の始皇の時、天竺の僧が渡来する語 第一

今は昔、震旦しんだんの秦しんの始皇しやうの時代に、天竺から僧がやって来た。名を釈利房しやくりぼうという。十八人の尊者を伴い、法文しやうもんや聖教しやうきやうを持って来たのである。

皇帝はこれを見て、お尋ねになった。

「お前は何者だ。どこの国から来たのか。見れば、その姿はなんとも奇怪きつがいである。頭には髪がないし、衣服の様子も人並みではない」

利房は答えて言った。

「西国さいこくに浄飯王じやうはんと申す大王がおいでになりましたが、一人の太子がおいでになり、名を悉達しつだつ太子と申し上げました。その太子は世を厭いとうて家を出、山に入つて六年の間苦行して、無上の悟りを得られたのでございます。その方を釈迦牟尼しやくかむに仏ぶつと申し上げます。仏様は四十

余年の間、一切の衆生しゆじやうのためにさまざまな法をお説きになりました。衆生は各々の機きによつて、それぞれに教化を蒙りまして、仏様はついに八十歳で涅槃ねはんにお入りになりましたけれども、滅後、四部しふの弟子しし

一つでございます。で、私はその仏様がお説きになった教法を伝えるために、やって来たのでございます」

ところが、皇帝は、

「お前は仏の弟子と名のるが、わしは仏とかいう者は知らぬし、比丘びくとかいう者も知らぬ。こやつ姿を見れば、奇怪千万だ。ただちに追放すべきだが、ただ帰すわけにはいかぬ。牢獄に入れて重罰に処してやろう。今後このような奇怪なことを言うやつらに見せしめにするためだ」

と、さっそく牢獄の役人を召して、利房たちを禁獄してしまった。役人は宣旨の通りに牢獄の中でも特に重罪犯人を入れるところに押し籠め、戸にはたくさんの錠をかけた。

その時、利房は歎き悲しみ、

「私は仏様の教法を伝えるため、はるばるこの国までやって参りました。ところが、悪王がいて、仏法をまだ知らないため、私は重罰を受けております。ああ悲しいことです。わが大師釈迦牟尼如来様、涅槃ねはんにお入りになってから久しくたってはおりましたが、神通力

であらたかにご覧になっておいででしょう。どうか私のこの苦しみを救って下さいませ」と祈念して臥していた。すると、夜になってから、釈迦如来が丈六のお姿で、紫磨黄金しまおうごんの光を放ち、虚空を飛んでいらっしやって、この牢獄を踏み破り、利房を取って去って行かれた。十八人の聖者も同様に逃げ去り、そのついでに、その牢獄に入れられていた多くの罪人たちも、こうして牢獄が壊れた時、皆思うがままに方々に逃げ去ってしまった。

その時、牢獄の役人は空に何か大きな音が鳴り響いたので、不審に思つて外に出て見た。すると、身のたけ一丈余りの金色こんじきの人が、金色の光を放つて虚空を飛んで来て、牢獄を踏み破つて入り、「閉じ籠められていた天竺てんしきの僧を取って行く、その音であつた。その旨を皇帝に報告すると、皇帝はひどく」お恐れになった。

このため、その時に天竺から伝来しようとした仏法は制止されて伝わらず、その後、後漢の明帝の時代に伝来したのであつた。

実はこれよりも昔、周しゅうの時代に聖教が伝来しており、阿育王あいくが造った塔もこの国にあつたのだが、秦の始皇が諸々の書を焼いた時、經典も皆焼かれてしまったのである。このように語り伝えているとのことである。

一 始皇 中国初の統一国家秦の初代皇帝。始皇帝。在位は紀元前二四七―二二〇年。ただし皇帝を